

『ポンジュ＝トルテル往復書簡集』

飯田, 伸二

<https://doi.org/10.15017/10017>

出版情報 : Stella. 18, pp.229-232, 1999-06-10. 九州大学フランス語フランス文学研究会
バージョン :
権利関係 :

『ボンジュ＝トルテル往復書簡集』

飯 田 伸 二

フランシス・ボンジュは1942年に出版した『物の味方』の成功に励まされて文筆を生活の柱とする決意を新たにする。またジャン・トルテルは1945年からマルセイユの文芸誌『カイエ・デュ・シュッド』（以下『カイエ』）の編集に参画しながら、パリでの自作発表の機会をうかがう。レジスタンス運動をつうじて知りあい、以後長らく親交を温めることになる2人はともに自作品の流布と正当化というあい似た課題を背負って戦後の活動を開始した。本書は、そのような彼らが1944年からおよそ40年間にわたって交わした往復書簡を収める。それぞれの文学的戦略がいかなるものだったかを探るうえで、きわめて貴重な記録といえるだろう¹⁾。

パリ解放後、ボンジュはフランス共産党やそれに近い文学者たち（アラゴン、エリュアール）とは一定の距離を置くいっぽう、ナチス協力作家の取り扱いをめぐるジャン・ポーランと対立した。こうした状況のなか『カイエ』は作品発表の重要な場でありつづけた。同誌は1966年に終刊したが、ボンジュはそれまでに「注釈つきのよろい戸」「あんず」などを含む10以上のテキストを発表しているのである²⁾。本書簡集は、トルテルが詩人を積極的に受け入れただけでなく、その主要作品が誕生する契機を提供したことも教えてくれる。『一冊のマレルブ論のために』（1965年）の冒頭部は1951年6月21日の日付となっているが、実際にはバロック・古典文学に造詣の深いトルテルの強い勧めにしたがい、すでに1949年末から創作が開始されていたのである。さらに1951年10月9日の書簡は、ボンジュが同作品執筆のために父の死の思い出と深く結びついた都市カーンをほぼ30年ぶりに訪れた、という興味ぶかい事実を伝えている。

書簡集からはボンジュが編集者として『カイエ』で活躍した経緯もうかがい知ることができる。同誌は彼のイニシアティブのもとに、作家（ポーラン、ガ

ブリエル・オーディジオ)や批評家(ブリス・パラン, ジョルジュ・ガランボン), 美術関係者(アンドレ・マッソン, ダニエル・カーンワイラー)を対象に1949年から「新しいレトリック構築の可能性」について大規模なアンケートを実施したのである³⁾。アンケート結果の発表は2年にわたり, 計18人の回答が公表された。編集部の名で掲載されたアンケートの質問・主旨説明も実際にはボンジュの手によるものであった。さらにこの原稿が編集長ジャン・バラールではなくトルテルに送られた事実からも両者の親密な関係がうかがえよう。

トルテルは書評や批評において積極的にボンジュについて語った。作品の分析をつうじて, その擁護に大きく貢献したのである。書簡集には, 自作をとりあげるよう依頼するボンジュの姿が頻繁に見られる。『カイエ』内部で現代文学にもっとも理解のあった友人の鋭敏な批評精神にたいする信頼にくわえ, 編集部での彼の影響力に期待していたためであろう。たとえば1950年12月にボンジュは「一杯の水」についての批評をオーディジオに依頼するようトルテルに提案すると同時に, 当人にも「マイ・クリエイティヴ・メソッド」『セヌ河』『5つのサポート』などをまとめて論じるようもちかけている。1952年には再び「クモ」や『やむにやまれぬ表現の欲求』を題材とした批評を準備するよう勧めている⁴⁾。さらに1957年には, ピエロ・ビゴニアリーの論文を『カイエ』に全文掲載してはどうかと打診している⁵⁾。その際ボンジュは, 前年に『新フランス評論』の編んだ特集号ではこの論文の一部しか掲載されなかった点を強調しているが, ここにも地方雑誌のパリ文化への対抗意識と, 外国人作家・批評家を広く紹介してきた伝統とを巧みに刺激して自作をとりあげさせようとする狙いが読みとれよう。

たび重なる要求に着実に応えるトルテルとは対照的に, ボンジュが彼のために試みたポーランやマルセル・アルランへのとりなしのほうは十分な効果をあげたとはいいがたい。たとえば『新フランス評論』に彼の作品が掲載されるまで, ボンジュは1956年9月から翌年6月までポーランと執拗に交渉を繰り返さなければならなかった。さらに詩集がガリマルからはじめて上梓されるには1968年を待たねばならないのである。こうしたアンバランスは, トルテルが編集委員として『カイエ』に及ぼす影響力と, ポーランらと絶えず不安定な関係にあったボンジュの立場との落差を如実に反映したものといえるだろう。

読者のなかには以上の記述から2人の関係をたんに状況の産物だと判断される向きもあろう。じじつ彼らをとりまく状況が一変した1960年代前半から、書簡のやりとりは徐々にではあるが間遠になってゆく。『テル・ケル』グループからは文学的パトロンとしてもちあげられ、また作品集の相次ぐ出版により「大作家」としての風格を身につけはじめた詩人にとって、戦後徐々に影響力を失っていった一地方文芸誌の編集委員の存在感が薄れてゆくのは当然といえば当然である。しかしながら2人の詩人は、俗な言い方だが「友情」の絆で堅く結ばれていたこと、さらにその友情の根底にはなによりも相手の文学的営為にたいする深い理解があったことを忘れてはなるまい。こうした友情・共感に支えられていたからこそ、温かい気遣いにみちたやりとりが高齢にいたるまで続いたのである。なかでも1970年代以降のボンジュにとって急速に重要性をましてゆくエピキュリズムを論じた長大なトルテル宛書簡(1970年3月28日)は、終始揺らぐことのなかった信頼関係の雄弁な証左といえるであろう。

*

本書簡集の編纂・校訂にはベルナル・ブーニョとベルナル・ヴェックがあたった。ブーニョは今年2月に第1巻が刊行されたプレイアド版『ボンジュ全集』⁹⁾の編集責任者で、現在CNRSとモントリオール大学が共同ですすめているボンジュ遺稿の整理作業の主要メンバーでもある。とりわけ書簡の探索・整理・刊行を精力的におこなっており、今回の仕事には最適任といっている。かたやヴェックはボンジュ作品における間テキスト研究のパイオニアとして知られ、プレイアド版の編集にも参加している。

現存の確認された往復書簡がすべて活字化されているにもかかわらず、刊行者も認めるように、本書簡集に「資料上の欠落」がないわけではない。収録された210通の大部分がボンジュの書簡で、トルテルの書簡は38通にすぎないのである。1964年以前のものにいたってはわずかに6通しか収められていない。つまりボンジュが『カイエ』に寄稿していた時期のトルテル書簡はほとんどすべてが抜け落ちているのである。この欠落は同時期の両者の関係を知るうえでかなりか、ボンジュと同誌とのそれを検証するうえでも大きな痛手といわねばなるまい。とりわけトルテルが「シュルレアリストと親しく、サン＝ジョン・ペ

ルスやヴァレリーに魅せられていた『カイエ』編集部にポンジュやウージェーヌ・ギュルヴィックを受け入れさせるのにはそれなりの苦勞をともなった」との旨を証言していただけに⁷⁾、彼の書簡が量的にもう少し充実していればという感想を抱かずにはいられない。

とはいえ、本書簡集がポンジュの文学活動を知るうえで第一級の資料であることはまちがいない。南仏が戦後のポンジュ文学の特権的な背景であるばかりでなく、著作出版上の重要な戦略拠点でもあった事実を証しているからだ。つまり手紙のやりとりから読みとれるのは、フランス文壇の2大勢力であった『新フランス評論』や共産党系文学者たちからはなにかば疎んじられながらも、地方の文学集団、さらには外国人研究者（ピゴニアリー、マックス・ベンス）や、『テル・ケル』などアヴァンギャルドとのネットワークを駆使して自作を世に認めさせようとする詩人の大いなる企ての物語にほかならないのである。

註

- 1) Francis PONGE et Jean TORTEL, *Correspondance 1944-1981*. Édition établie et présentée par Bernard BEUGNOT et Bernard VECK. Paris : Stock, coll. «Versus», 1998, 327 pp.
- 2) Voir Bernard BEUGNOT, «Questions rhétoriques : Ponge et les *Cahiers du Sud*», *Revue des Sciences humaines*, 1992, n° 228, pp. 51-69 ; Alain PAIRE, *Chronique des «Cahiers du Sud». 1914-1916*, Paris : IMEC, coll. «L'édition contemporaine», 1993, 411 pp.
- 3) Voir BEUGNOT, *art. cité*.
- 4) Voir Jean TORTEL, «F. Ponge ou la formulation globale», *Cahiers du Sud*, n° 319, janvier-juin 1953, pp. 492-500.
- 5) Voir Piero BIGONGIARI, «Le parti pris de Ponge», *Cahiers du Sud*, n° 344, janvier 1958 pp. 109-116.
- 6) Francis PONGE, *Œuvres complètes*, tome I. Édition publiée sous la direction de Bernard BEUGNOT. Paris : Gallimard, coll. «Bibliothèque de la Pléiade», 1999, C+1211 pp.
- 7) Voir PAIRE, *op. cit.*, p. 329.